第３分科会　知性・創造性

【研究主題】知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントの推進

Ⅰ　研究発表と協議

【協議題①】

「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組

＜発表題＞

地域のよさを生かし，「生きる力」を育む特色ある教育課程～小中一貫教育の充実を図る教育課程の編成・実施と評価～

鹿児島県鹿屋市立西原台小学校　校長
田中　雄志

＜発表概要＞

令和３年１月，中央教育審議会より「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」が出された。この答申の「９年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」の項では，「義務教育の目的・目標を達成する観点から，小学校６年間，中学校３年間と分断するのではなく，９年間を通した教育課程，指導体制，教師の養成等の在り方について一体的に検討を進める必要がある」としている。本校のある鹿屋市においては，中学校区ごとに９年間を３期に分け，各期ごとに目指す子ども像を設定したり学校や家庭が行う共通実践事項を策定したりしているが，これは中教審答申が目指す方向性と同じであり，今後ますます重要な視点となってくるものである。本稿では，鹿屋市の地域性を生かした児童生徒の「生きる力」を育むための教育課程の編成と実施・評価について，小中一貫教育の視点から研究を進めていく。

(1)　第一鹿屋中学校区の取組

①　基本理念や方向性，取組事項等の確立

②　教職員の連携

③　児童生徒の連携

(2)　大姶良中学校区の取組

①　基本理念や方向性，取組事項等の確立

②　教職員の連携

③　児童生徒の連携

＜協議の概要＞

(1)　小中の相互理解の推進

小学校と中学校の歩み寄りが大切で，９年間で子供を育てる，子供の力を付けるという共通の意識をもつことが大切である。そのためにも，まずは，校長同士のつながりが必要である。その中で，中学校が核になることで効果が上がっている地域もあるという報告もあった。ただ，取組によっては中学校教員の負担が大きくなることもあり，小学校教員が中学校の指導に際し乗り入れを行うような９年間を見越したカリキュラムや体制作りが必要である。

(2)　小中での共通実践に取り組むカリキュラムや体制づくり

今回の提言を受けて，まずは一つの教科や○○教育などのテーマに沿った柱を立てて一貫教育を行っていくのも一つの方法である。また，生徒指導上や学校生活に関する具体的な実践を揃える共通実践から始めることは，すぐにできるので取り組んでいきたいという意見も出された。

(3)　校長の指導性として

小学校と中学校では学校文化が違うが，相互理解に努め，互いに９年間を見通してどのような力を付けていくかを念頭に，共通の取組をカリキュラムに落とし込んでいき，地域に広げながら，「地域に開かれた教育課程」にしていく必要がある。そのためにも，職員の必要感や納得感について理解を求め，そして達成感を味わえるようにしていくことが大切である。

【協議題②】

しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメントの推進

＜発表題＞

資質・能力の育成を目指す教科等横断的なカリキュラムと授業の改善

熊本県八代市立有佐小学校　校長
岩見　浩史

＜発表概要＞

これからの時代に求められる資質・能力を育成するためには，校長は，ビジョンを明確にし，教頭と連携して教務主任や研究主任等に積極的に働きかけ，教育の内容を教科等横断的な視点で組み立て，学校内外の教育資源を最大限に活用しながら教育活動を展開させ，教育実践の分析と客観的なデータに基づいて教育課程の実施状況を評価，改善して学校の教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントを推進していかなければならない。また，カリキュラムの改善とともに，授業が改善されなければ資質・能力を全ての児童に育成することはできない。新型コロナウイルス感染症の影響により，GIGAスクール構想による１人１台端末と高速大容量のネットワーク環境が前倒しで整備され，教育環境は急激に変化した。この新たな環境を効果的に活用して，「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが学校に求められている。

(1)　資質・能力の育成を目指す教科等横断的な視点でのカリキュラム改善

①　資質・能力の関連をまとめた単元計画の作成

②　カリキュラムの評価と改善に向けての取組

③　「自ら学ぶ意欲」を育成するカリキュラム改善

(2)　授業改善のための校内研修の充実

①　研究テーマ設定に向けて

②　「個別最適な学び」の理解を深める取組

③　研究授業を核とした授業改善の取組

＜協議の概要＞

(1)　カリキュラム・マネジメントの推進

カリキュラム・マネジメントを推進していくには校長の意向が大きく関わってくる。２学期制（年２回の評価）も増えてきている。夏休み直前まで授業ができるメリットもあるが，夏休みの保護者個人面談など新たな負担も出てきている。カリキュラム・マネジメントと働き方改革の両方を視野に入れながら進めていくのが難しい。

(2)　コロナ明けのカリキュラム・マネジメント

新型コロナが５類に引き下げられた後の，行事等のもち方が課題である。運動会は午前中開催が増えてきているが，終日開催に戻す学校もある。今後は，ただ単に元に戻すのではなく，その行事のねらい，子供，職員，保護者の願いを考慮しながら見直していくことが大事である。

(3)　個別最適な学び

個別最適な学びの姿，モデルを管理職自身も持てていないのではないかと思い悩むことがある。「これが個別最適な学びです」というマニュアルもない。先進校を視察する中で，何となく見えてきたのが，子供たちに学びの選択の機会を，単元計画のどこに仕組むかを意識するだけでも随分授業が変わってきたということである。

Ⅱ　まとめ

協議題①では，地域性を考えながら，小中一貫教育を柱に，中学校区における小中で共通認識の下，地域に開かれた教育課程や共通実践の取組を行っていくという報告と協議がなされた。職員の必要感や納得感を得られるように校長がその意義を伝え，職員間でのつながりや取組のつながりが，子供たちにそして地域に広がるという方向性が示された。

協議題②では，カリキュラム・マネジメントを推進していく上で，カリキュラムの改善，授業改善のための校内研修の充実について報告と協議がなされた。地域や学校が変われば取組も様々である。カリキュラム・マネジメントの成功の鍵は校長のマネジメント力にある。校長自ら学び，自校の研修に生かす。校長と教頭がしっかりタッグを組み，職員を受けとめ，全職員で実践を重ねながら整えていくことの大切さが示された。